

【概要】

ハーンのニューオリンズ時代における日本との出会い
——『日本の詩瞥見』をめぐって——

中島 淑恵

小論は、1923年にモーデルによって編集・出版されたラフカディオ・ハーンの『東西文学評論 (*Essays in European and Oriental Literature*)』に収められた「日本の詩瞥見 (A Peep at Japanese poetry)」を再検討することによって、ニューオリンズ時代のハーンがどのように「日本」なるものと出会ったのかについて考察を行ったものである。

「日本の詩瞥見」は、1883年5月27日付の『タイムズ・デモクラット』紙に掲載された無署名のコラムである。確かにこの時期ハーンは同誌の文芸部長であり、このコラムはおそらくハーンの筆になるものと推定できるが、それを裏付ける客観的な証拠はこれまで挙げられてこなかった。しかし、富山大学附属図書館の小泉八雲旧蔵書（ヘルン文庫）の文献を精査すると、このコラムを書くために資料としたのではないかと思われるものがいくつか見つかり、このコラムがハーンの筆になるものと確定するための根拠の一つといえるのではないかという結論に達した。

また、ハーンが日本に最初に興味を抱いたのは、1884年にニューオリンズで開催された万国博覧会で日本の様々な文物に触れ、また農商務省の服部一三と出会ってそれらの文物の説明を受けことであると一般に言われているが、小論で取り上げるコラムは、それより1年も前に書かれたものであり、実際に日本の文物に触れるよりも前に、ハーンは書物によってすでに「日本」なるものに関心を寄せていたのではないかということが十分に考えられる。しかし、『東西文学評論』に収められたその他のアジアについてのコラムを見ると、インドや中国のものもあり、この時点ではまだ日本が、それらアジア諸国の中の「ワン・オブ・ゼム」だったのであって、とりわけ渡航したいと切望するような唯一の対象ではなかったと言えるかもしれない。ところが、これもヘルン文庫の文献を精査することによって、おそらくこの時期に、他のアジアの国々と日本を明確に隔てる根拠ができたのではないかと思われるメモ書きが見つかったのである。

来日後のハーンは確かに、横浜でチェンバレン訳の『古事記』を入手しているほか、数多くの日本に関する書物を収集している。しかし、「日本の詩瞥見」を執筆するために参考にしたと思われる、ハーンがアメリカ時代に購入した書物を精査してみると、英語で書かれたものは書架番号 [956] の Griffis, William Elliot, *Japanese fairy world: studies from the Wonder-Lore of Japan*, Schenectady, N. Y. 1880. と、書架番号 [967] の Lanman, Charles, *Leading men of Japan: with an historical summary of the Empire*, Boston, D. Lothrop, 1883. のわずか2冊であるのに対して、フランス語で書かれたものは以下の通り、7冊を数えることが分かった。

- [1971] *Actes de la société philologique*, Tome 4, N. 7 Juillet 1874, Paris. Mythologie et légendes et Esquimaux du Groenland. La mythologie des Japonais : d'après le Koku-si-ryakus, par Emile Buranouf.
- [2007] Léon de Rosny, *La civilisation japonaise : conférence, faites à l'école spéciale des langues orientales*, Paris, Ernest Leroux, 1883.
- [2008] Léon de Rosny, *Les peuples orientaux : connus des anciens Chinois*, Paris, Ernest Leroux, 1883.
- [2026] Hir et Ranjhan, *légende du Penjab* traduite par M. Benjamin Duprat, 1863. *Mythologie japonaise*, par P. Mounichou, Paris, Benjamin Duprat, 1863.
- [2028] Léon de Rosny, *Anthologie japonaise, poésie anciennes et modernes*, Paris, Maisonneuve, 1871.
- [2030] Léon de Rosny, *Traité de l'éducation des vers à soie au Japon*, Paris, Maisonneuve, 1868.
- [2035] Turrenttini, Francois, *Tami-no-nigivai, l'activité humaine-contes moraux*, Paris, Maisonneuve, 1871.

英語で書かれた書物のうち書架番号[967]のものは、歴史上の人物から同時代に至る日本の偉人を紹介したもので、ハーンが関心を示していた神話やおとぎ話とは一線を画するものであり、「日本の詩瞥見」を著すために直接参照したようには思われない。これに対して書架番号[956]のものは、ハーンに関心に沿うものだったようで、中にみられる書き込みからも、「日本」なるものが他のアジア諸国とは異なり、ハーンに関心の中心に位置するようになっていった様子をうかがうことが出来るものである。これに比べてフランス語で書かれた書物の大半は、日本の神話、伝承あるいは詩歌に関連するものであり、民俗学に関する文献がそうであったように、ニューオリンズ時代のハーンは、日本に関する知識もやはり、もっぱらフランス語文献から得ていたということが分かる。とりわけ同時代のフランスの日本学者レオン・ド・ロニーには深く傾倒していたようで、上に挙げた日本関連の書物の他にも、ロニーの著書はこの時代にハーンは網羅的に購入していたようである。

これら旧蔵書の中で、コラム「日本の詩瞥見」を書くにあたって参考にしたとされるものは、書架番号[2028] の、レオン・ド・ロニーの『日本詞華集』である。ハーンはそのコラムの初めに、夫君たる天智天皇の死を悼むのちの持統天皇による歌「八隅知しわが大王の夕されば…」を引用して英訳を付しているほか、同書から 11 首の和歌を引用して英訳を付している。引用はハーンの意に沿うものを選んだようであり、順番も異なるⁱ。

ところで、わが国ではこれまであまり指摘されてこなかったことのようにであるが、ロニーによって付けられた『日本詞華集 (*Anthologie japonaise*)』という書名は、どう考えても『ギリシア詞華集 (フランス語では *Anthologie grecque*)』を意識して付けられたもので

あると考えられる。このことについて実は著者であるロニー自身は何も語っておらず、むしろ、日本の詩歌には、西洋人が認識するところの「詩が全く欠如している (la poésie faisait complètement défaut)」ⁱⁱと述べている。しかし、これに先立つ前書きで、同時期にコレージュ・ド・フランスの同僚であったと思われる法学者エドワール・ド・ラブレーが、「彼（＝ロニー）がこの詩集に『詞華集』という題名を付けたのは、いかにももっともなことと思われる。というのも、その短さによって、ここに収められた詩は、古代のエピグラムを想起させるからである。日本人は、ギリシア人がとくに卓越していたこの詩形に特段の好みを有していたようである (Il a eu raison d'intituler son recueil *Anthologie*, car par leur brièveté elles rappellent les épigrammes antiques. Il semble que les Japonais aient un goût particulier pour ce genre où les Grecs ont excellé.)」ⁱⁱⁱと述べていることから分かるように、この題名は、少なくともフランスの同時代の知識人には、即座に『ギリシア詞華集』を想起させるものであったことは想像に難くない。

ヘルン文庫の蔵書の『日本詞華集』の裏見返しを精査してみると^{iv}、左ページに、鉛筆書きで縦に、52、55、57、90 という算用数字の書き込みがあることが分かる。これらのページにはそれぞれ、「日本の詩瞥見」に引用された、「かげりあればけふぬぎすてつふぢごろも… (52 頁)」、「なにわがたまぢかきあしのふしのまも… (55 頁)」、「ながゝらんこゝろもしらずくろかみの… (57 頁)」、「もろともにひえはつるこそ… (90 頁)」の和歌が紹介されている^v。ちなみにこの時期のハーンは、ロニーの『日本詞華集』にあるようなアルファベットによる日本の詩のトランスクリプションは行っておらず、英語による詩の内容の意識のみを挙げている^{vi}。これがロニーの仏訳の忠実な英訳かということと必ずしもそうではなく、ハーンが間違えたというよりは、おそらく意図的に歪曲したのではないかと思われる点も多い。例えば 52 頁の詩は、本来藤原道信の歌であり、ロニーの著書でも「父（太政大臣藤原為光）の死に接して息子としての愛に深く浸った道信が、一年を超えて喪服を着続けたいと願った (Mitsinobou, pénétré des sentiments de l'amour filial, aurait voulu porter le deuil au-delà d'une année)」^{vii}ものと説明されているが、ハーンは敢えてこの歌を「もう一人別の女流詩人 (another woman-poet)」^{viii}の詠んだものであるとして、その思いを持統天皇の歌の感興に接続させようとしている。

ところで、ヘルン文庫『日本詞華集』の裏見返しの右側には、ただ一つ、79 の数字が鉛筆で書かれており、その 79 頁には、「きりぎりすなくやしもよのさむしろに…」の歌についての説明がある。これは、「日本の詩瞥見」では引用されていない歌であるが、ハーンの著作を熱心に読む者ならば、ギリギリスがハーンにとってどれほど重要なものか、それは古代ギリシアとハーン自身を、そして日本をつなぐものとしてどれほどの意味を持つものであるかは容易に了解できるであろう。この小さな昆虫が、ギリシアと日本をつなぐことによって、ハーンにとって日本は母なる国ギリシアと分かちがたく結びつたのではないだろうか。そのようないわば化学変化のようなものが、来日よりはるか前のニューオリンズ時代にすでに起きていた、ということの証左として、同書の書き込みは機能し得るので

はないだろうかというのが小論の結論のひとつである。こうしてギリシアと日本との相同性についての思いは、この時期のハーンの中でますます募ってゆくように思われ、それがやがて日本渡航への夢へとつながっていったのであろう。また、『日本詞華集』にこれらの書き込みがあることによって、ハーンがコラム「日本の詩瞥見」を書くにあたって、この本を参考にしたことがある程度客観的に裏付けられるのではないかと考えられるのである。

また、書き込みはないので必ずしも確実に証明できるわけではないが、ハーンがやがて自分の日本名となる「八雲」の名を、というよりスサノオノミコトが詠ったとされる「八雲立つ…」の歌を、この時期にすでに強く意識していたのではないか、という仮説もまた可能になる。なぜならばロニーの『日本詞華集』の冒頭の注に、この歌のみが目立つ形で、まず「Ya-kumo tatsu idzumo ya-ye-gaki tsuma-gome-ni, / Ya-y e-gaki tsukurum sono yaye-gaki-wo」とアルファベットによるトランスクリプションがなされ、それに続いて歌の意味がフランス語で説明されているからである。

Semblable à huit nuages (qui s'accumulet sur la voûte céleste), les murailles octuplus d'Idzumo, pour établir (le gynécée de) ma femme, je les ai faites octuples, les octuplus murailles.

(天空に重なる) 八つの雲にも似て、出雲の八重の城壁は、妻（の臥所）を作るため、私は壁を八重にも重ねたのだ^{ix}。

さらにロニーはここで、数字の 8 の意味を重ねて説明している。

Le mot *ya*, dans les expressions *ya-kumo* « huit nuages » et *y a-ye-gaki* « les murailles octuples », indique un nombre indéterminé, « un grand nombre, beaucoup, plusieurs ».

「やくも（八つの雲）」や「やえがき（八重の城壁）」という表現の中の「や」という語は、「大量、たくさん、幾つもの」という限定されない数を示すものである^x。

いまひとつ、ハーンがニューオリンズ時代に購入したと思われる書物のうちに、書架番号[1971]のパリの文芸協会会報第 4 号がある。これは、エスキモーやグリーンランドの神話の紹介に続いて、ブラノフによる日本の神話の紹介があり、その中で唯一引用されているのが、この素戔鳴命が詠んだとされる「八雲立つ…」の歌なのである^{xi}。ブラノフは同書の中で、これをロニーの『日本詞華集』からの引用であることを断ったうえで、ロニーによるフランス語訳を採録している。

八雲という日本名は一般に、妻セツの養祖父が命名したと言われているが、ここに、ハーン自身はこの「八雲」なる言葉を来日よりはるか以前に知っていて強く意識していたの

ではないかという仮説も成り立つ。これは、ハーンが『古事記』をいつ読んだか、という問題とも関連してくるのであろうが、実はチェンバレンの『古事記』を手にするよりもはるか前にハーンは「八雲立つ…」の歌に関心を抱き、来日後即座に購入した『古事記』の裏見返しに素戔鳴命についておびただしい書き込みを残したのではないかという想像もまた可能になるのである。

上に見た日本関連の書物は、ハーンが来日時にアメリカに残してきたもので、ハーンはその後ついぞ目にする事のなかったものである。したがって若きジャーナリストたるハーンにそれらの書物がどれほどの影響を与えたのかについては、想像するよりほかに術はないし、旧蔵書にないからといってハーンが読まなかったと断定できるものではないことも十分納得できる。しかし、旧蔵書に残された薄い鉛筆の書き込みの跡をたどりながら、ささやかな命のギリギリスを媒介として、この時期のハーンの中で、母なる国ギリシアと日本が分かちがたく有機的に結びついたしるしを見つけることで、その後のハーンの軌跡をたどる道しるべを見つけたような心持になることは、ヘルン文庫を残された私たちの特権であり義務でもあると考えるのは、驕慢に過ぎるのだろうか。

i すべての和歌には英訳が付されているが、これはロニーの仏訳を元に行っているものと思われる。本来は両者を比較対照して確認するべきであるが、それについては次の拙稿を待たれたい。

ii Léon de Rosny, *Anthologie japonaise*, Maisonneuve et Cie, 1871, p. III.

iii *Ibid.*, p. XV.

iv ハーンの手書きは多くの場合、裏見返しまたは裏表紙に鉛筆で数字の書き込みがあり、その数字はページ数を示していること、そのページには多くの場合、ハーンが関心を持ったと思われる部分の左または右余白に縦に鉛筆で線が引いてあることが調査によって分かっている。この習慣はアメリカ時代のごく早い時期から晩年まで変わらないものだったようである。

v 『ラフカディオ・ハーン著作集』などでは、これらの和歌の出典や、もとの和歌そのものも訳者（林隆）によって紹介されているので、ハーンの記事がアメリカの読者に何を伝え、何は伝えていないのかが分かりにくくなっている（「日本の詩瞥見」『ラフカディオ・ハーン著作集』第5巻、277 - 287 頁参照のこと）。やはりハーン研究は原著に立ち戻らなければその意義が分かりにくくなることの好例でもある。なお、ロニーの『日本詞華集』では、旧仮名遣いの平仮名でこれらの歌が紹介されているが、小論では読者の便宜を図って引用を新仮名遣いの平仮名とした。

vi 来日後のハーンは日本語の音韻にも深い関心を抱き、和歌や俳諧を紹介する際にはアルファベットによるトランスクリプションを必ずつけている。後年のこのような状況と比較すると、このようなトランスクリプションの欠如は、ニューオリンズ時代のハーンが未だ、生の日本語を「聴いた」体験がないことを物語っていると言えるのかもしれないし、新聞のコラムという制約上、紙幅を十分にさくことが出来なかったため、どうしても読者に伝えたい内容の伝達を最優先したためと言えるのかもしれない。

vii *Ibid.*, p. 52.

viii Lafcadio Hearn, *Essays in European and Oriental Literature*, Mordell, Albert Ed. 1923, p. 334.

ix *Op. cit.*, p. X.

x *Ibid.*, p. X.

xi Emile Buranouf « La mythologie des Japonais » *Actes de la société philologique*,

Tome 4, N. 7 Juillet 1874, p.11.